

## 文庫訪問の心得(二)

今井, 源衛  
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/16300>

---

出版情報 : 文献探究. 3, pp.1-2, 1978-09-23. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

## 文庫訪問の心得(二)

今井源衛

前回、文庫に閲覧許可を求め、手続きについて述べたが、まずそれについて一・二付け加えることにする。閲覧許可が来ても、その期日・時間については、細かく日・時が指定されている場合と、およその休館日だけが記されていて、特定日時の指定はない場合とがある。こちらとしては、いずれにしても、そのまま放って置かずに、出かける前に、それでは何日の何時に参上するので、よろしく、といった趣旨の手紙を再度出しておく必要がある。そのついでに他の一・二か処を同じ日の中に訪れたいというような場合には、文庫到着の時間に予定とは多少のズレの出ることも止むをえまいが、少くとも、午前中とか午後とかの区別だけはつけて申入れることである。というのは、昼食時間にかかると、かからないかで、文庫の側では、公共施設ならば問題はないが、そうでなければ、食事けどうするつもりかなど、気にされることも多い。文庫訪問が、今日のようにいわば大衆化しない以前の頃には、それは特殊な学者とか書物に志の篤い風流人のわざとして、文庫にも歓迎される場合が多かつたし、その気

持をあらわす為にも、遠来の客にきつけない扱いは出来ないとい、特に昼食の世話などには配慮を加えられたいという事が往々あった。その余風が現在でも、多少は残っている。もつとも今では、昼食をご馳走して下さるといふのはよほど特別のことで、一般にはお茶の用意くらいに留まるわけだから、あまりこの点に入らなう。しかも、とにかく訪問予定時刻はなるべく書いた方がいいし、又、それから大箱にいくらがわなないようにした。又、当日予定が狂った場合にも、必ず電話をかけて、その旨を連絡し先方の諒解を求めねばならぬ。さて、いよいよ、文庫訪問に出かける前にせむしておきたい事は、当該文庫の蔵書目録に一応目を通したり、その文庫の沿革について概略の予備知識を持つておくことである。この事は、前回に簡単に記したが、もう一度具体的に書く事にする。文庫沿革の概略を知るには、周知の岡田温寛修訂『日本文庫めぐり』(昭三九出版ニュース社)のような簡便な本もあるが、もっと詳しく知りたければ、有名な文庫にはたいていは、治

革概略を記したパンフレットが用意されているから、あらかじめ直接申込んだ方が早い。又、各文庫の蔵書目録に、その文庫の性格が序文や凡例などの形でまごめて出ていることもあり、『図書陵史籍解題』(昭三三)のように、善本解題の形をとりながら、その中に、自然に文庫の性格を知ることが出来る場合も多い。それらのことが頭に入っていないと、蔵書印でまごつき、函架番号の付録で大切なことを見落してしまったりする。それをあらかじめ知っていると、いいいので、調査時間も大違ひである。

つぎに、いよいよ文庫訪問に出発するわけだが、携行文房具類としては、

1. 鉛筆(黒・色各種)
2. ゴム消し、ナイフ、虫めがね(ルーペ)
3. 物差し
4. ノート・カード用紙

ぐらいは、ぜひ必要であろう。

ノの鉛筆は、文庫によっては、黒以外の色鉛筆は一切禁止のところもあるから、使用に先立って、係員にたしかめることだ。もっとも色鉛筆は、校合の際など、諸本により色を変えて用いるのに便利なことはもちろしん、写真代用に、肝腎の奥書や署名の臨模など、黒鉛筆よりも柔かくて便利である。万年筆・ボールペンは

一切厳禁。それらを机の上に置いておくだけでも、係員に警戒されるものになるから、たとえ持っていて、筆箱の中に入れて姿を見せない方がよい。

2の虫めがねは、もちろん細字を読む為だが、それ以上に、文字が上から下ぞつてはなにかを見るとき、又、文書や軸物のような場合、虫損の穴を見て、もし、文字の墨がその穴の内部の右側にまで入ってければ、それは、虫喰いが出来てからあとで書いた文字で、後人の偽作の可能性が強く、其処が白ければ、その文字は虫の入る以前からのものである事だけは確かだといえる。真贋の秘め手になるほどのことはいないが、少くとも偽作の発見には有力な道具である。

3の物のさしは、一般には鋼製巻尺の小型のメジャ―を用いる人が多いようだが、格好はヤボでも、日用大工に使う安物の木製折疊式メートル差しが便利である。筆箱に入れるにも、鉛筆との折合がよろしく本のタテ・ヨコの寸法を測るにも、鋼製のように折たりおどつたりせず素直である。写真をとるにも、折り疊みの処を直角に曲げて、本の側に囲むようにおけば、一本でタテ・ヨコの寸法が分る。はがねの巻尺では、二本を縦・横に交叉して置いて、おとなしくさせるには、文鎮を置いたり、手で抑えたり、かなりヤッかいなのである。

(続稿)